

資料 1 1

ニホンザルにおける autoimmune disease
の有無（病理組織に基づく）と超音波画像診断—
MSG (major salivary glands) と TG (thyroid gland)
を対象として
穂積弘樹（綾部協立病院）

報告書未提出

資料 1 2

霊長類の肝臓の比較解剖学的研究

バタスモンキー、シルバールトン、マンドリルの
肝臓区分について
中久喜正一（東京農工大）・江原昭善（椋山女学
園大）

今回使用した材料は京都大学霊長類研究所所蔵
のホルマリン固定のバタスモンキー(Erythrocebus
patas)、シルバールトン(Presbytis cristatus)
およびマンドリル(Papio sphinx)の肝臓各一例で
ある。これらの材料の肝臓の別れ方を良く観察し
た後、最近中久喜が開発した発泡スチロール溶液
注入法により、門脈、肝静脈および胆管系の鋳型
標本を作り、我々がすでに明らかにしてある 2 0
種類の霊長類の肝臓の葉区分、門脈、肝静脈およ
び胆管系の分布状態と比較した。

予測した通り、臍静脈の侵入部の左側から門脈
分布を受ける領域を内側左葉、同じく右側から門
脈分布を受ける領域を方形葉と定義して葉区分を
行なうと、いずれの肝臓も外側左葉、内側左葉、
方形葉、内側右葉、外側右葉、尾状葉、および乳
頭葉の 7 葉に区別できる。

バタスモンキーとマンドリルの肝臓は外部から
見ると方形葉と内側右葉は癒合して一葉になって
おり、その境に胆嚢を認める。他の肝臓は各々分
れているが、マンドリルの内側左葉と方形葉の間
の切痕は浅い。シルバールトンの肝臓では方形葉
と内側右葉の他に、外側左葉と内側左葉も癒合し
ている。通常、腹空から取り出したサル肝臓を
臓側面から見ると、後大静脈は肝臓の上部を右側
から左側に向かって走り、肝臓の中程で横隔膜を
貫くのが一般的だが、今回使用したシルバールト
ンの例では後大静脈は門脈の入り口の右側から肝
実質に侵入して右上部にぬける。そのため、外側
右葉と尾状葉は他のサルの肝臓のものと形態を異
にする。従ってシルバールトンについては今後さ
らに例数を増やして詳細に調べる必要がある。